

# 小学校図画工作科教科書に関する日米の比較研究

笠 置 三 郎 ・ 中 村 和 世 (広島大学)

## 1. はじめに

本稿は、小学校図画工作科教科書に関して、米国デイヴィス社より1998年発行の『アドベンチャーズ・イン・アート』<sup>1)</sup>と、開隆堂より2002年発行の『図画工作(開隆堂)』<sup>2)</sup>を比較することから、今日の図画工作科のカリキュラムのあり方について考察することを目的とする。アメリカという異なる文化圏において作成された教科書の方針と内容について比較検討することにより、現代の教育で求められている国際的見地に立つカリキュラム開発の視点を見出せることができるのではないかと考える。また、他国の教科書に表される異なる美術教育の立場によって我が国の教育を批判的に振り返ることができ、小学校図画工作科をさらに充実させるための視点が見い出されるのではないかと考える。

本稿で取り上げる両教科書は、国レベルで定められた教育基準に準拠しており、教科書作成の方針について確かな理解を得るために、アメリカ合衆国美術教育連盟(National Art Education Association)によって作成・発行されている『全国視覚芸術基準(National Visual Arts Standards)』<sup>3)</sup>と、文部省から発行されている『小学校学習指導要領解説・図画工作編』<sup>4)</sup>の方針と基準を比較する。次に、両教科書に取り上げられている題材の内容について検討しながら学習内容の傾向について比較する。どのような領域によって学習内容が構成されており、どのような考え方に基づいて各領域の内容が決定されているか詳しくみていく。さらに、両教科書の出版に伴って作成された教師用指導書に示されている学習指導方法について比較し、どのような教育的観点から指導が勧められているか検討する。結論では、内容基準、学習内容、指導方法の3項目の比較検討に基づいて今日の小学校・図画工作科のカリキュラムの方向性について考察する。

## 2. 内容基準の比較

日本においては、学習指導要領は、国が定めた教育課程の基準であり、義務教育の立場から各小学校においてはカリキュラムの編成及び実施に当たっては学習指導要領に示された内容に従うことが原則となっている。これとは異なり、アメリカでは、政府が設定した教育課程に関する基

準はなく、民間教育団体である1947年に創立されたアメリカ合衆国美術教育連盟が自発的に教育基準を編集作成している。1994年に発行された『全国視覚芸術基準』は、アメリカ合衆国教育省議会によって作成された『2000年目標：アメリカ教育法令』に言明されている「すべての子供に対して芸術を含む基本的教科の学習を保障する」という主唱に従って作成されたものである<sup>5)</sup>。この基準は、政府からの助成金を得て、美術教育に携わる大学レベルの研究者、州代表、幼稚園から高校の教師、州指導主事などが協力して、1991年から作成され、1994年に完成に至っている。

『全国視覚芸術基準』は、すべての小学校において図画工作科の授業時間が保障されているとは限らないアメリカ合衆国の教育事情を汲みつつ、内容基準を設定し州の芸術教育に適用することの根拠を以下の2点において強調している<sup>6)</sup>。第1には、芸術教育は、主要教科と同様、基本的な知識と技能から構成される教科内容を基礎に成立していることである。第2には、明確な教育基準を州の教育に適用することで、より確実に教育水準を高めることができるということである。つまり、任意に設定されがちであった芸術教育の内容をより厳格に基準として設定することで、学習の達成をより確実にすることができることが示されている。また、全国視覚芸術基準は学習目標としての内容基準を提示しているのであってカリキュラムを提供しているのではなく、教育実践に関しては、州、地域、教師が決定すべきであることを強調している。視覚芸術基準には、日本の『学習指導要領解説・図画工作科編』に示されているような教科目標についての明示はないが、児童と社会にとって芸術教育が果たす役割について論じられている。まず、児童に関しては、「直感力、推論能力、想像力、手先の器用さを高めるとともに、表現とコミュニケーションに関して、多様な教養を個性のある形に構築することによって、全人的人間を育成する」<sup>7)</sup>ことに芸術教育が寄与することが示されている。社会に関しては、7つの観点から論じられている。それらは、(1)過去から現在にわたる人間経験を理解する、(2)他者の考え方を尊重し共感する、(3)芸術に関する問題解決の方法を学ぶ、(4)芸術の文化、社会における働きを理解する、(5)答えのない状況において判断することができる、(6)知識に基づいた文化の所産と問題に対する批評力を高める、(7)自己表現能力を高めるである。『全国視覚芸術基準』では、学習指導要領の「学習目標」と「内容」の両方を兼ねるような基準が幼稚園から高等学校にわたって示されている<sup>8)</sup>。表1に小学校に関する内容を示す。

**表1 . 全国視覚芸術基準( National Visual Arts Standards )**

幼稚園から第4学年

1. 内容基準：媒材、技術、方法を理解し活用すること

達成基準：

- a . 媒材、技術、方法の相違を知る
- b . 異なる媒材、技術、方法によって異なる結果になることを述べる
- c . 考え、経験、話しを伝達するために異なる媒材、技術、方法を活用する

d. 美術の材料と道具を安全に責任をもって活用する

2. 内容基準：構造と機能に関する知識を活用すること

達成基準：

- a. 考えを伝達するために、美術の視覚的な特徴と意図にある違いを知る
- b. 異なる表現特徴と組織的な原理によって異なる結果になることを述べる
- c. 考えを伝達するために美術の視覚的構成と機能を活用する

3. 内容基準：一連の内容、シンボル、考えを選択し評価すること

達成基準：

- a. 芸術作品のために期待される内容について探究し理解する
- b. 意味を伝達するために、内容、シンボル、考えを選択し活用する

4. 内容基準：歴史と文化に関連する視覚芸術を理解すること

達成基準：

- a. 視覚芸術は、歴史とともに様々な文化と特定の関連があることを知る
- b. 特定の文化、時代、地域に特定の芸術作品が属することを識別することができる
- c. 芸術作品を制作したり研究したりすることにおいて、歴史、文化、視覚芸術はどのように影響を与え合うか明示することができる

5. 内容基準：自己と他者の作品の特徴とよい点について考え評価すること

達成基準：

- a. 視覚芸術作品を創作するためには様々な目的があることを理解する
- b. 人々の経験が特定の芸術作品にどのように影響するか述べる
- c. 特定の芸術作品に対して異なる反応があることを理解する

6. 内容基準：視覚芸術と他の教科とを関連させること

達成基準：

- a. 視覚芸術の特性と他の芸術教科の特性との類似点と相違点を理解し活用する
- b. 視覚芸術と教育課程の他の教科との関連性を認識する

第5学年から第8学年

1. 内容基準：媒材、技術、方法を理解し活用すること

達成基準：

- a. 媒材、技術、方法を選択する；考えを伝達するために、どのような媒材、技術、方法が効果的であるのか検討する；自分の選択の有効性について検討する
- b. 自分の経験と考えをよりよく伝達するために、美術の媒材、技術、方法の特質と特徴を意図的に利用する

2. 内容基準：構造と機能に関する知識を活用すること

達成基準：

- a. 視覚的構成と機能の効果について一般化し、自分の作品においてそれらの効果について検討する
- b. 組織的な構成を活用し考えを伝達するために、どのような構成が効果的であるのか検討する
- c. 考えをさらによりよく伝達するために美術の構成や機能の特性を選択し活用する

3. 内容基準：一連の内容、シンボル、考えを選択し評価すること

達成基準：

- a. 自分の作品において意図した意味を伝達するために、視覚的、空間的、時間的概念と内容とを統合する
- b. 芸術作品において意図した意味を伝達する文脈、価値、美学の知識を明示する主題、テーマ、シンボルを活用する

4. 内容基準：歴史と文化に関連する視覚芸術を理解すること

達成基準：

- a. 様々な時代と文化における芸術作品の特徴を知り比較することができる
- b. 様々な美術作品について歴史的・文化的な文脈から記述するとともに見分ける
- c. 時代と地域の要因（例えば、天候、資源、考え、テクノロジー）が芸術作品に意味と価値を与える視覚的特徴にどのように影響するのか検討し、記述し、説明することができる

5. 内容基準：自己と他者の作品の特徴とよい点について考え評価すること

達成基準：

- a. 芸術作品を創作するための多様な目的を比較する
- b. 文化的・美的探究を通して、特定の芸術作品に存在する現代的・歴史的意味を検討する
- c. 自分の作品や様々な時代と文化からの芸術作品に対する個々の反応の多様性について述べ比較する

6. 内容基準：視覚芸術と他の教科とを関連させること

達成基準：

- a. 類似している内容、歴史的期間、文化的文脈を共有する2つ以上の美術形態において作品の特性を比較する
- b. 学校で教えられている他教科の原理や内容は視覚芸術とどのように相互関連しているのか述べる

全国視覚芸術基準は、州や各学校の実態に合わせてカリキュラムが弾力的に作成・運営されるよう、各学年ごとではなく、幼稚園から小学校第4学年、小学校第5学年から第8学年（中学校第2学年）で内容をまとめて示している。「内容基準」とは、すべての児童が習得すべき知識と技能を示し、「達成基準」とは、すべての児童がまとまった学習期間である小学校第4学年、第8学年を終了するまでに到達している理解のレベルを示している。アメリカ合衆国美術教育連盟によって作成されたこのような基準内容からは、アメリカの図画工作科の傾向を伺うことができ、その方針と内容を決定している4つの視点を見い出すことができる。第1には、教科内容の構造に基づく学習順序と範囲の設定を重視していることである。第2に、制作活動のみでなく歴史的・文化的観点から視覚芸術の学習を捉えていることである。第3に、児童一人ひとりの批判的評価を基にした視覚芸術に対する見方・考え方を培うことを図画工作科の基本としていることである。第4に、視覚芸術を他の教科との関連で学習することを強調していることである。

以上のようなアメリカ合衆国美術教育連盟が定める図画工作科の方針と内容とは異なり、日本においては、教科内容を中心に教育課程を編成するよりも、「ゆとりの教育」の一環として児童の思いや発想を伸ばすことに主眼を置いて目標と内容が設定されている。ゆとりの教育が求められるようになった背景には次のような日本の現代教育の実状が挙げられる。第1には、従来の学校教育が画一的で知識詰め込み型の傾向があり、児童の学習に対する主体性を培ってこなかったという反省である。第2は、生活形態の変容として、国際化や情報化がすすむ激しい変化が伴う社会において、これに柔軟に対応し自己を見失わずに生きていく基本的な姿勢を学校教育で培うことが求められているということである。このような現状を踏まえ、平成8年の中央教育審議会第1次答申では、教育の質的転換を図るために、ゆとりの中で自ら学び自ら考える力などの生き

る力の育成を基本とし、教育内容の厳選と基礎・基本の徹底を図ること、一人一人の個性を生かすための教育を推進すること、豊かな人間性とたくましい体をはぐくむための教育を改善すること、横断的・総合的な指導を推進するために「総合的な学習の時間」を設けること、完全学校週5日制を導入することなどを提言している<sup>9)</sup>。

この中央教育審議会の提言を受けて、『小学校学習指導要領解説・図画工作科編』では、目標における改善点として、「児童が、自らつくりだす喜びを味わえるよう、個性を生かした多様で創造的な活動を促すようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を育成することを一層重視する」<sup>10)</sup>ことを示している。また、児童一人ひとりの個性を伸ばすゆとりの教育が学校や児童の実態等に応じて弾力的に行えるように、目標と内容を2学年まとめて示している。さらに目標と内容は、アメリカの視覚芸術基準にみられるように技能や知識の達成よりも関心や意欲など質的な面を重んじている。指導要領の改善点に従って作成された文部省検定済教科書である『図画工作（開隆堂）』は、編集の基本的方針として「造形的な活動をとおして、他へのちがいを認め、自主的・主体的に自らの課題を見つけ、創造的に解決していこうとする資質や能力など、『生きる力（自分らしさ）を培うこと」<sup>11)</sup>を目指している。そして、教科書は上下巻として2学年をまとめている。開隆堂の教科書では、「生きる力」とは「自分らしさ」であると解釈され造形活動の体験を通して発見的・創造的な表現活動の展開と、児童の造形表現への共感性を育むことが主眼とされている。また、自分らしさとは、個性的な思いやこだわりであり、自分なりの自由な表現であると理解されている。自分らしさとしての生きる力を育成するために、『図画工作（開隆堂）』では、4つのテーマに基づいて内容が編成されている。それらは、(1)子どもたちの心を開く、(2)自分らしさを大切にする、(3)造形的なものの見方や考え方を養う、(4)総合的な造形表現活動の経験と相互理解である。以上のような教科書の編成方針に表されているように、日本の図画工作科においては、教科内容の構造を考慮した基準よりも、造形活動を通して児童の思いや発想を豊かにし自分らしさを形成していくことが主要なねらいとなっている。

### 3. 学習内容の比較

次に学習内容に着目して両教科書を比較すると、内容を構成している領域の捉え方に『アドベンチャーズ・イン・アート』と『図画工作（開隆堂）』において相違がみられる。前者においては、4つの領域から学習内容を引き出している。4つの領域とは、「知覚」、「創造的表現」、「文化と伝統」、「知識に基づいた判断」であり、これらの領域を相互に関連づけながら学習を構成するべきであることが主張されている。「知覚」とは、美的な知覚認識に関する学習内容を意味する。美的認識とは、自分の感覚、知識、感情を活用して環境や美術作品の意味を創造していくことであり、線、色、質感などの造形的要素から成る視覚的多様性を認識するとともに、パターン、プロポーシオン、バランスなどの構造について学習することを意味する。「創造的表現」とは、多様な技法の習得に基づく平面と立体からなる表現の探究を中心とする学習である。創造的表現

の探究によって児童は自分自身の美術に対する考え方を発展させ、改善し、豊かな表現のために技法を活用することが期待されている。「文化と伝統」とはアメリカのみでなく、ヨーロッパ、アフリカ、アジアなど世界美術の伝統に関する学習内容である。この領域に関する学習においては、女性や少数派民俗の芸術への貢献が、国際的な影響と動向とともに考慮に入れられていることが注目される。小学校第1学年から第3学年においては、美術の多様なスタイルについて学習し、動物、人々、環境のような美術の普遍的テーマを取り挙げて学習内容を構成している。そして、小学校第4学年から第6学年においては、過去から現在にわたって美術の特質に関して、文化的、個人的、実用的な側面に着目しながら学習内容が設定されている。「知識に基づいた判断」とは、教科内容に基づいた美的判断の能力を育成するための学習内容を意味し、自分自身のみでなく他者の作品に関しても、知覚、分析、解釈、判断からなる鑑賞法を活用しながら美的判断力を高めていくことが求められている。第1学年から第4学年にかけては、美術を討議する基本的な態度と技能を育成するために「会話方式」によって鑑賞学習が展開される。このような学習では、自分自身と他者の作品について、構想の質、手法、対象などを比較対照しながら学習が進められる。第5学年から第6学年にかけては、美術批評の専門的な方法について学習する。学習では、美的判断の根拠となっている基準について学び、すべての単元における評価の活動において美的判断の基準について学習することが望まれている。加えて、『アドベンチャーズ・イン・アート』では、以上の4つの領域から構成される内容が他教科の内容と統合されながら学習が展開されることを配慮している。

アメリカの教科書と同様に『図画工作(開隆堂)』においても、他教科との関連を強める総合的な学習への配慮がなされている。アメリカの場合は、他教科と図画工作科の内容を統合した学習に知識・技能習得の効率をみており、日本の場合は、問題解決能力などを高める総合的な学習の時間を念頭に他教科との関連を考えている。『図画工作(開隆堂)』の学習内容は、「表現」と「鑑賞」の2領域からなり、注目すべき相違は、「造形遊び」という学習が全学年において取り入れられていることである。造形遊びという日本の図画工作科に特有な学習内容は、2つの特徴をもっている。第1には、体全体を使い、材料や場所を生かしてたのしむ大きな活動であることである。第2には、材料の特徴を生かして展開する分解・構成的な活動であることである。造形遊びの学習では、作品に表された結果以上に試行錯誤の過程を通して自分らしい表し方や造形的なものを見方や考え方を自然に形成することが重要であり、平成10年に改訂された学習指導要領では高学年にまで導入され、図画工作科においてさらに重要な位置を占めるようになった。教科内容ではなく活動自体に意味を見い出す「造形遊び」の教育上の観点は、表現と鑑賞の内容の捉え方にも見い出すことができる。つまり、表現と鑑賞の両領域全般にわたって、教科内容を踏まえた学習よりも児童自身の思いや発想を基に児童のつくりたいものをつくるという主体性を重視した活動が多く取り入れられている。絵画においては、全学年にわたって風景画や人物画というような種別はみられず、児童の思いや想像に基づく学習が強調されている。立体においても同

様、量感などの彫刻的造形性よりも、粘土という素材の特性について学ぶとともに児童のイメージを基にした創作活動が中心となっている。鑑賞においては、線、色、形などの造形要素や、バランス、対比などの造形原理の学習よりも、作家や造形表現に対する児童自身の思いを大切に学習が考えられている。また、アメリカとは異なり、鑑賞学習を文化的・歴史的な作品理解として捉えるよりも、他者との共感性を育み相互理解を促す手段として捉えている。

#### 4．指導方法の比較

次に、指導方法について比較するために、『アドベンチャーズ・イン・アート』と『図画工作（開隆堂）』の両教科書の刊行に伴って出版された指導書をもとに検討していく。両教科書の指導書に共通している項目は、「題材名」、「活動課題」、「題材の内容と目標」、「材料・用具・場の設定」、「指導の流れとポイント」であり、前者では、この共通項目のほかに「美術用語」、「他教科との統合」の項目が加わっていることに注目される。美術用語についての例を挙げると、小学校第5学年用の「描写」に関する題材では「図案の要素（線、形、色感、色、空間、質感）」、「図案の原理（リズム、バランス、パターン、プロポーション、強調、統合性、多様性）」が用語として取り挙げられている<sup>12)</sup>。小学校第2学年用の動物を作る「立体」に関する題材では、「形」、「粘土」、「丸彫り」という用語が取り挙げられている<sup>13)</sup>。他教科との統合の例を挙げると、「描写」の題材については、言語教科(Language Arts)と統合させて、これまで学習した図案の要素と原理に関する用語の復習を兼ねながら掲示用の表を作成することが勧められている。そして、一つ一つの用語に関してより幅の広い表に拡大していくことが提案されている。例えば、「線」という項目に関して、「太い線、濃い線、曲がった線、まっすぐな線、均一の線、不均一の線」という用語を加えていくことが提案されている。立体の題材においては科学教科(Science)と統合させて、一人ひとりの作品と結び付けながら動物の生息地のモデルを創ることが提案されている。次に、表現と鑑賞の領域から代表的な題材を取り上げて、指導法の傾向の違いに関して具体的にみていきたい。『アドベンチャーズ・イン・アート』の表現領域からは、小学校第1学年の「立体感のある形：粘土彫刻」<sup>14)</sup>、『図画工作（開隆堂）』からは、同様に立体に関する題材である低学年の「いっしょにあそんでくれるゆめのどうぶつ」<sup>15)</sup>を比較する。鑑賞題材に関しては、前者からは、第6学年の「美術について討議する」<sup>16)</sup>、後者からは同様に高学年の「夢をかたち」<sup>17)</sup>を取り上げて比較する。

立体に関する題材は、両教科書で扱われているテーマが同じ動物ではあるが、指導のアプローチに大きな相違がみられる。まず、単元名に着目すると、『アドベンチャーズ・イン・アート』では、彫刻の基礎用語である「立体感」、「形」、「粘土」が単元名に反映されていることが理解される。他方、『図画工作（開隆堂）』では、つくる動物と児童の世界との共感性を促すような「いっしょにあそんでくれるゆめのどうぶつ」という題名が設定されている。このような題材名の表現の違いから、アメリカの教科書が教科内容を中心とし、日本のものが児童を中心としているこ

とが見受けられる。

次に、指導法の相違についてであるが、まず題材との出会わせ方に着目すると、「立体感のある形：粘土彫刻」<sup>18)</sup>では、陶芸用の土について教師が児童に説明することから始まる。他方、「いっしょにあそんでくれるゆめのどうぶつ」<sup>19)</sup>では、一緒に遊んでくれる夢の動物が出てくる物語りを作り、読み聞かせることから始まる。学習に関しては、前者では、『エジプト墳墓のカバ』とフランス人の芸術家による『北極熊』を鑑賞することから始まり、歴史的・文化的観点と彫刻的観点から作品の造形的特徴をみていく指導が展開される。この鑑賞活動では、どの地域でいつ頃制作されたかという質問から始まり、カバのデザインに関してパピルスの花を基に創作したことや、熊の彫刻のすべすべの質感は、滑らかな毛皮を表現していることに児童を注目させることが求められている。このような学習展開とは異なり、「いっしょにあそんでくれるゆめのどうぶつ」では、作品鑑賞の活動がなく、夢の動物の話しを聞くことから児童一人ひとりのイメージを膨らませて制作に導くような指導が勧められている。

鑑賞指導と同様に制作指導における両者のアプローチの相違は明らかであり、それは動物を形作る手順によく表れている。『アドベンチャーズ・イン・アート』の指導法は、彫刻作りの基本的な手法に従っており、動物の体のおおまかな形を球、卵、円柱など幾何学的に解釈することから始められ、おおまかな形から頭、首、脚などの部分を作っていくことが勧められている。他方『図画工作（開隆堂）』においては、児童の思いを基にした学習展開が求められており、児童がいちばん作りたところから作らせていくことの大切さが強調されている。作品を仕上げることよりも児童に思いをこめさせることが指導のポイントであり、「作っていく中で思いが変わっていくことを温かく認める教師の姿勢が、子どもたちに安心感を与える大きな要素である」と明示されていることから指導に対する姿勢が伺える。

以上のような表現指導のアプローチにみられる傾向は、鑑賞に関する指導についても同じように見出せる。小学校第6学年用の鑑賞題材を取り挙げながら、『アドベンチャーズ・イン・アート』からは「美術について討議する」<sup>20)</sup>、『図画工作（開隆堂）』からは「夢をかたちに」<sup>21)</sup>に関して詳しくみていきたい。まず、題材名についてであるが、表現題材の場合と同様、前者は教科内容を表す記述になっており、後者は、思いを表現する記述になっている。題材において取り上げられている作家と作品は、「美術について討議する」においては、ヘンリ・マティスの『海の獣』であり、「夢をかたちに」では、未だ発展途上の造形作家と作品である。専門家ではなく修行中の作家を取り上げる根拠は、子供一人ひとりが作家に共感し造形表現活動への興味・関心・意欲を高めることであり、「すばらしい作品を作った作家としてではなく、『自分の好きなことに夢中になっている身近な先輩』として紹介したい」という指導意図に基づいている。

学習に関しては、「美術について討議する」では、児童が美術批評を行う技法と美術に対する自分なりの評価基準を形成することをねらいとして指導が考えられている。美術批評を行う技法とは、一般に美術史や美術批評の専門家によって活用されている方法であり、4つのステップが

ら構成される。第1のステップは、「記述」であり、作品に描かれたものについて客観的に観察することが求められる。「醜い」「美しい」「かわいい」などの主観的な見方を極力避け、線、色など認識できる造形的要素についてできるだけ明確にすることが求められる。第2のステップは、「分析」であり、造形的要素の関係に着目しながら対比や強調など造形的原理に着目していくことが求められる。第3のステップは、「解釈」である。解釈は、作品の観察に基づきながら、考え、感情など言葉に表せないメッセージについて多様に推論していく過程であると説明される。第4のステップは、「判断」である。この段階においては、作品のスタイルに表されている美的基準に関して話し合うことが求められる。例えば、具象芸術と抽象芸術の美的基準の相違について検討していくことなどが含まれる。このような作品批評の技法を活用しながら、児童は、以前に制作した作品に対して批評活動を行い、自分の判断の根拠になっている基準に気づき、他者との基準の相違について理解するよう促すことが指導において求められている。他方、「夢をかたちに」では、作品を批評する技能や評価基準の育成よりも、作品に込められた作者の思いを共感的に理解することに鑑賞活動の焦点があてられている。学習では、作者の作品づくりに関する作文を読んだり、作家が制作に取り組んでいる姿を観察したりして、作者の思いが実現される過程に共感し、自分の思いを大切にしながら、夢の実現に向けて生きていく姿勢を学ばせることに学習の意味をもたせている。さらに発展として、趣味で手芸をしている親や地域で芸術活動を行っている身近な人々とかかわりをもたせ、気軽に作品のよさを感じ取ったり、作者の造形活動に対する思い入れに共感させる学習を提案している。

## 5. 考察

異なる文化的・社会的背景によって作成されたアメリカと日本の教科書であるが、図画工作科の特性を表現活動であると捉え、個人の形成に教育的意義をおく点に関しては共通している。個人形成という目標を共有しながらも、基準内容、学習内容、指導方法の比較からは、以下の相違点が見出せる。

第1には、アメリカの場合、個人の形成は、造形芸術文化に関する知識と技能に基づきながら固有の考え方・感じ方を形成していく活動によるという立場にたっており、日本の場合、児童一人ひとりの思いを引き出し伸ばすことに造形活動の意味を見い出している。両国とも、図画工作科において児童が自分なりの表現を構築していくことをねらいとしているのだが、アメリカの場合、教科の知識と技能の習得によって個人形成の選択の幅を拡げようとする傾向がみられる。他方、日本の場合、個人形成の基と考えられる児童自身の思いや発想を引き出すことに重点をおいている。

第2には、図画工作科における表現活動の捉え方の相違である。アメリカの場合、個人の表現は、教科の内容や技能の習得に基づいて形成されるべきであるという捉え方が見受けられるが、日本の場合、素材と思いを基に表現が生まれるという捉え方が見出せる。このことは、アメリカ

の視覚芸術基準や教科書において、低学年から教科内容が重視されているのに対して、日本では教科内容よりも、素材との触れ合いを重視した造形遊びが全学年において導入されていることから明らかである。

第3には、学習指導法についてである。アメリカの場合、教科内容をいかに効率的に児童に学ばせるかということに重点が置かれていることが見出せる。他方、日本の場合、いかに児童一人ひとりの思いを造形活動に結び付けるかということに主眼が置かれている。制作においては、アメリカの場合、技能を習得することが目指されており、日本の場合、自分なりの思いを込めることが目指されている。鑑賞においては、アメリカの場合、児童が自分なりの美的価値基準を効率的に構築していくことが目指されており、日本においては、作家や作品との共感性を大切にする指導が勧められている。

以上のような相違点から、両国において小学校図画工作科における共通課題でありカリキュラムの方針と内容を決定する個人形成の捉え方に関して、アメリカでは内容主義に基づいており、日本では心情主義に基づいている傾向が見出せる。今日の日本の図画工作科がアメリカから学ぶべき点は、この心情主義を克服するための視点ではないかと考える。日本の教育においては、自ら考え、自ら判断し、自ら表現していく「生きる力」が今後とも求められる。真に生きる力とは心情のみに基づいて表現、行動することではなく、芸術文化に関する知識と技能の習得に基づいてこそ形成されるのではないかと考える。思いがあっても、造形芸術に関する知識と技能が乏しいために、思いどおりに自己を表現できないことがある。造形芸術の活動に関して自分の思いを表現する力を確実に図画工作科で育成していくために、アメリカの視覚芸術基準や教科書に示されたカリキュラムの構成の視点は参考になると考える。今後の研究では、内容主義の傾向をもっている昭和52年までの学習指導要領の示す図画工作科の内容と、本稿で取りあげた現代のアメリカの図画工作科を比較し、共通点や相違点に着目しながら、個人形成に造形芸術の教科内容がどのような役割を果たすのか考察を深めたい。

## 註

- 1) Chapman, L. (1998). *Adventures in Art*, Worcester, MA : Davis Publication.
- 2) 『図画工作』<sub>α</sub>、開隆堂、平成14年。
- 3) *National Visual Arts Standards*, Reston, VA : National Art Education Association, 1994.
- 4) 『小学校学習指導要領解説・図画工作科編』<sub>α</sub>、文部省、平成11年。
- 5) *National Visual Arts Standards*, Reston, VA : National Art Education Association, 1994 p. 34.
- 6) *ibid*, p. 34.
- 7) *ibid*, p. 2.
- 8) *ibid*, p. 15-20.
- 9) 『小学校学習指導要領解説：総則編』<sub>α</sub>、文部省、平成11年、p. 1.
- 10) 『小学校学習指導要領解説・図画工作科編』<sub>α</sub>、文部省、平成11年、p. 4.

- 11) 『図画工作学習指導書・図説編・図画工作』<sub>ア</sub>、開隆堂、平成14年、p.3.
- 12) Chapman, L. (1998). *Adventures in Art 5*, Worcester, MA : Davis Publication, 1998 p.67.
- 13) Chapman, L. (1998). *Adventures in Art 1*, Worcester, MA : Davis Publication, 1998 p.88-89.
- 14) *ibid.*, p.88-89.
- 15) 『ずがこうさく1・2下 まほうのねんど』<sub>ア</sub>、開隆堂、平成14年、p.22-23.
- 16) Chapman, L. (1998). *Adventures in Art 6*, Worcester, MA : Davis Publication, 1998 p.38-39.
- 17) 『図画工作5・6下 心のキャンパス』<sub>ア</sub>、開隆堂、平成14年、p.4-5.
- 18) Chapman, L. (1998). *Adventures in Art 1 : Teacher's Edition*, Worcester, MA : Davis Publication, 1998 p.88-89.
- 19) 『ずがこうさく1・2下 まほうのねんど』<sub>ア</sub>、開隆堂、平成14年、p.28-29.
- 20) Chapman, L. (1998). *Adventures in Art 6 : Teacher's Edition*, Worcester, MA : Davis Publication, 1998 p.38-39.
- 21) 『図画工作5・6下 心のキャンパス』<sub>ア</sub>、開隆堂、平成14年、p.10-11.